

採集記録・観測記録

37年ぶりにアサギマダラを確認

円子 紳一¹⁾

Shinichi Maruko. 2018. *Parantica sita* record in Urahoro in 37 years.

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 18: 41.

2017年9月9日、浦幌町東山でアサギマダラ (*Parantica sita* (Kollar, 1844)) が確認された (図1)。町内での確認は、1980年6月1日の2頭 (万年、活平) に次いで3例目となる (円子 1980)。実に37年ぶりの確認である。

この日行われた「ラジオ体操とウォーキング会」(ノルディックウォーキング愛好会主催) に参加した増子礼子さん (町新町) が発見し、北村敦子さん (町帯富) がスマートフォンで撮影した。益子さんは「ふわふわと飛来し、すぐ近くのヨツバヒヨドリの花に止まった (図2)。町立博物館の『ちょうちょ展』(2016年12月) で標本を見ていたので、すぐにアサギマダラとわかりびっくりした。大きくてきれい」と話していた。

本種の成虫の前翅長 (ぜんしちょう=前翅の根本から先端までの長さ) は5-6cmほど。前翅の半透明の水色部分や後翅の斑点の「浅葱 (あさぎ)」色が名前の由来。日本で幼虫が越冬できる北限は食草キジョラン (ガガイモ科) の分布にほぼ一致していて、関東あたりまでといわれ、北海道で見られるのはまれとされている (白水 2011)。

本種は「旅をする蝶」としても有名で、秋になると南西方向へ「渡り」を始める。翅のマーキング調査では、和歌山県から放された個体が約2500km離れた香

港で捕獲されたこともあるという。

帯広百年記念館の伊藤彩子学芸員によると「最近では十勝管内で毎年のように確認されているとの情報もある」とのこと。マダラチョウ科の仲間は「毒蝶」としても知られている。アサギマダラの毒はオスの性フェロモンの材料であるピロリジジナルカロイド (PA) で、PAを含むヨツバヒヨドリなどの花を好む性質がある (佐藤 2006; 栗田 2014)。本年以降はより注意して観察したい。

観察情報を伝えてくれた増子さん、画像データを提供してくれた北村さんに感謝申し上げます。

引用文献

- 白水隆. 2011. 日本産蝶類標準図鑑 (第3刷). 学研教育出版, 東京.
- 佐藤英治. 2006. アサギマダラ海を渡る蝶の謎 (初版第1刷). 山と溪谷社, 東京.
- 栗田昌裕. 2014. 謎の蝶アサギマダラはなぜ海を渡るのか? (第1版第3刷発行). PHPエディターズ・グループ, 東京.
- 円子紳一. 1980. アサギマダラ2頭を採集. 浦幌町立郷土博物館報告, 16: 24.



図1 アサギマダラ (矢印) が確認された東山の坂道



図2 ヨツバヒヨドリで吸蜜する37年振りに確認されたアサギマダラ (拡大写真)

1) 浦幌の自然を楽しむ会 (〒089-5634 北海道十勝郡浦幌町字帯富)